渡辺淳一

まひる野（上）

まひる野

（上）

渡辺淳一

新潮社

まひる野（上）

昭和五十二年四月二十日　発行
昭和五十二年十一月十日　十一刷

著者　渡辺淳一
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七十一
電話　業務(03)二六六一五一一一
編集(03)二六六一五四一一
振替　東京四一八〇八

定価八五〇円

印刷　株式会社金羊社・製本　新宿加藤製本株式会社
© Junichi Watanabe 1977, Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

まひる野（上）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

辻村多紀が東山若王子の家を出ようとしたとき、京の街に驟雨が訪れた。

明方、小雨が降っていたが朝になってあがり、そのあと、薄く陽も射していただけに、思いがけない雨だった。

多紀は一旦、履いていくつもりで、玄関に出してあった皮草履を紙袋に包み、替りに鮫小紋の利休下駄を揃えた。

「えらい降ってきましたなあ、お車でも呼びまひょうか」

うしろからお手伝いの安代が声をかけた。多紀が小学生のときから勤めていて、今年で丁度六十になる。

「いいわ、下で拾うから」

多紀は手早く、旅行ケースに皮草履の袋をおし込むと立上がった。

雨で暗くなったせいか、藍大島に琉球絣の雨ゴートを着た多紀の顔は、少し蒼ざめていた。

「ほな行ってまいります。あと、よろしく頼みます」

「そこまで、送っていきまひょうか」

「ほな済まないけど、これをお願いします」

多紀は旅行ケースのほうを安代に渡すと、自分は喪服の入っている和装ケースを手に持った。

「東京も、雨どっしゃろな」

表戸を開けると、庭も雨に濡れていた。十月の初めで、笹はまだ緑が濃かったが、木蓮の根元に一枚だけ、早い落葉があった。

多紀は表桔梗を染めた蛇の目を開き、そのあとを安代の黒い傘が従った。

右手にししおどしがある通り庭を抜けると、格子戸がある。そこをくぐり抜けると、舗装されたゆるやかな坂道になる。

降り出した雨で、坂の両側を水が流れていく。

「西のほうがちょっと明るいようどすけど」

若王子は大文字山の麓で、いくらか小高く、正面に街をこえて、西の山並が見渡せた。

雨雲はほぼ、京の街全体をおおっているらしいが、右手の愛宕山のあたりが、少し明るくなっていた。

「先に五条のお店のほうに、寄らはりますか？」

「そうします。新幹線は二時半だから、まだ少し時間があるでしょう」

多紀は小さな歩幅で、足先に力をいれながら坂を下りた。雨のせいもあるが、昼を過ぎたいまが、山沿いの住宅地の最も閑散な時間だった。

「明日、夕方までにはお帰りですやろな」

「それまでには、帰れると思うわ……」
昼までの授業が終わったのか、生徒が三人ほど黄色い雨ガッパを着て坂を上ってくる。それをやり過ごしてから安代がいった。
「しかし、えらいことどすな」
「なにが？」
「わざわざ東京まで……」
「ううん」
多紀が首を振ったとき、二人は坂を降りきって、南禅寺に続く道に出ていた。
雨は一向に止みそうもない。つい少し前、明るく見えた西の空も、坂の下から見上げると雨雲が拡って見える。
二人は「うじ茶」と書かれた、お茶屋の前に並んで、タクシーを待った。
いつもなら、南禅寺の方角から空車が流れてくるのが、こんな日にかぎって現れない。急な雨で、みな途中でつかまえられるのかもしれない。
「留守中、新聞社の方から電話がかかったら、どないしたらよろしおす」
安代が不安そうにいった。
「もうそんなのはほっといたらよろしいわ、いないといっといて」
多紀の強い調子に、安代は傘のなかでうなずいて、
「でも、お義母はんは、どうしてお行きにならへんのどす」
「そんなこといっても仕方ないでしょう。血のつながりあるのは、わたしだけですから」
多紀がいったとき、空車が近づいた。
「ほな、ありがとう」
多紀は安代から荷物をうけとって車に乗り込んだ。
「くれぐれも、気いつけておくれやす」
雨に濡れている窓の外で、安代が深々と頭を下げる。それにうなずいて多紀は運転手に告げた。
「五条大橋の手前までお願いします」
若王子から五条大橋まで、混んでいなければ十分とかからない。橋の二筋手前を、南へ下がったところに、多紀が社長をしている辻村扇子株式会社がある。
入口は小路に面して、幅五間ほどの小さな仕切りだが、二階建てで奥行は深い。
その店の前で車を降りると、多紀は傘をすぼめたまま、店へとびこんだ。
「お早うございます」
入口のところで、ライトバンに荷を積んでいた中川青年が挨拶をする。
「ご苦労さんどす、どこにお行きやす」
「型捺ししたのを、小池さんに廻して、かわりに折ったのをもろうてきます」
「そうそう、小池さんのお父さん、中風で入院しやはった

で聞いたけど、表の大坂さんにいって、五、六千円の果物を籠に詰めてもらって、差し上げてください」
「へえ」
「他に、職人さんのほうに、変わりはありませんか」
「別に……」
「ほな、お願いします」
多紀はそのまま階段を駈けあがる。
二階の狭い通路にも箱に包装された扇や、カレンダーが積みあげられ、人一人が、辛うじて通れるだけの幅しかない。そこを通り抜けて、奥から二つめの小部屋が、一応、応接室兼、多紀の社長室ということになっている。
多紀はその入口で、女事務員の靖子に、専務の吉岡を呼んでもらうように頼んで、雨ゴートを脱いだ。
「用どすか」
吉岡が少し無愛想な表情で入ってきた。この男の無愛想なのは、いまにはじまったことではない。もう三十年来、辻村家に勤めていて、いつもこんな調子である。
「お早うございます」
昼であろうが、午後であろうが、多紀は会社に出てきたときは、こんなふうにいう。それが最初に出てきたときの挨拶である。
「これから二時半ので東京へ行って参ります。明日、夕方までには帰りますから、よろしく頼みます」
「やっぱり行かはりますか」
吉岡源治は多紀の父の代から辻村家に勤めている。いわば扇子業界の表も裏も知りつくした男である。いまは会社組織になって、専務ということになっているが、多紀だけはいつも吉岡さんと呼んでいる。
「カレンダーのほうはいかがですか」
「刷り上がりは順調どすけど、東京ではお時間ないでしょな」
「明日、午前十一時からお葬式らしいから、午後に少し間があると思うけど、日本橋に寄ってきましょうか」
「そう願えると、ありがたいんどすけど」
「わかりました、見本はどうします?」
「二、三枚、持って行っとくりやすか」
吉岡は階下にカレンダーの見本をとりに行く。
以前、扇子屋は扇子だけを造っていたが、最近、夏の手のすく期間を利用して、カレンダーも造るようになってきた。
日本橋へ行くのは、その卸し筋へ挨拶してくるためである。
一人になって、多紀は急いで机の上に重ねてある書類に目を通した。ほとんどが、問屋や職人への、支払い伝票や領収書である。
「少し嵩ばるかもしれまへんな」
吉岡がカレンダーの見本を十種類ほど持ってきた。多紀はそれにはかまわず、一枚の伝票を示して、

「この十万円というのはなんです。飯田様となってるけど」
「ああ、それは要打ちの飯田への前貸しどす」
「また借りにきたの？」
「山科にいる弟が交通事故に遭ったというんですけど、また博打でも、費いこんだのかもしれまへん」
「よく注意しないと、いけませんね」
「きっう、いうてるんですが」
吉岡はうなずき、カレンダーを多紀の鞄に詰めこむ。
「少し重うなりましたが」
「平気よ、あ、いま何時？」
「そろそろ二時どす」
「大変、二時半の新幹線だから。雨はまだ降ってる？」
「止みそうもありまへんな、車で送りましょか」
「さっき、中川君が型捺しを運んでいったでしょう」
「もう一台のが空いてますさかい」
「ほな、お願いしようかしら」
吉岡は先になって、多紀の鞄を持つ。
「しかし、大変でんなあ」
「ううん」
多紀はかすかに笑うと、自分から先に廊下へ出た。
吉岡の運転する車が、京都駅に着いたのは、二時二十分だった。発車まで約十分ある。
「ちょっと待っとくれやす、いま車をおいてきますよって」
「大丈夫、一人で行けるわ」
多紀は旅行鞄と和装ケースを持って、改札口へ向かった。
平日の午後とあって、電車は比較的すいていた。多紀は雨ゴートを脱ぐと、グリーン車の窓際の席に坐った。
雨はなお京の街をおおい、そのなかを、電車はゆっくりと動き出す。
このまま黙って三時間、乗っていれば東京である。その間は店のことも、家のことも考えなくていい。眠ろうと、窓の景色を眺めようと、夕方には東京に着く。
だがそのあとは、いかにも辛すぎる。
お手伝いの安代も、専務の吉岡も、出しなに、口裏を合わせたように、「大変でんなあ」といった。
あれは同情だったのか、それとも励ましなのか。
安代は、義母が行くべきだといったが、父がいない以上、多紀が行くのは仕方がない。ほとんど外へ出たことのない義母では今度の用事は荷が重すぎるし、向こうでも納得しないかもしれない。
しかし父が死んで二年も経たないのに、こんなことで、喪服を着るようになるとは、多紀は思ってもいなかった。
父の葬儀のときは、もうこれで当分、喪服とは縁がないものと思ったが、今度は見も知らぬ人のために着なければならない。
弟のしでかした、あと始末とはいえ、いかにも気が重い。

お通夜は下北沢の蓮台寺というお寺だときいたが、そこも多紀には馴染みがなかった。新宿から出る小田急線で六つ目の駅だときいたが、東京駅からタクシーでも拾って、尋ねていくより仕方がない。

東京に着くのが五時半で、お通夜は六時半からだというから、間に合うと思うが、辻村隆彦の姉だといって、はたして入れてもらえるだろうか。

お悼みに来た者に、まさか門前払いをくわせるとは思えないが、みなが一斉に多紀を振り返ることは間違いない。冷たい視線で見詰められるのはともかく、仏になった人の縁者でも近づいてきて、喚き散らすかもしれない。

そんなことにでもなったら、多紀はどうすればいいのか。ひたすら黙って頭を下げていればいいのか、それとも、なにか謝罪の言葉でも述べるべきなのか。

こんなとき、父でも生きていてくれると力強いが、一人で切り盛りしている家では、相談する相手もいない。

とにかくいまは成り行きにまかせるより仕方がない。

多紀はもう一度、雨に煙る野面へ目を向けた。

多紀の弟の隆彦が、学生運動の活動家になったのは、いつのころからなのであろうか。多紀には、くわしいことはわからない。

ただ大学に入って二年経ち、専門課程に移行したと思ったころ、隆彦はすでに家にはいなかった。

六つ違いの姉と弟というへだたりはあっても、姉弟二人だけという親しさで、弟のことはある程度知っているつもりであった。それが、大学に入ってから、隆彦の生活は急にわからなくなった。

京扇子製造卸しの老舗「辻村」の長男坊として、ぼんぼん育ちではあったが、頭はそんな悪いほうではなかった。

身内の贔屓めにみるわけでないが、高校の現役から京大へ、ストレートで入ったのだから、かなり優秀なほうではある。

父の隆平のいうままに、経済学部を志望し、将来は「辻村」のあとを継ぐことも、いわば既定の事実であった。

それがどういうわけで、学生運動などに走りだしたのか。

辻村の身うちに、そんな過激な思想の持ち主などいない。してみると、やはり大学にいってからの友達の影響なのか、それとも、高校までおさえつけられていた青春の衝動が、一気に爆発したとでもいうことなのか。

大学に入った二年目の半ば、突然「辻村」の店などつぶれてもいい、と物騒なことをいい出し、学生運動の意義などをしきりに話し出した。

それからは、慌てる父や多紀を尻目に、堂々と家をあけるようになり、二年目の末にはついに、友達のところに下宿するといって、家を出てしまった。

「へんなものに憑かれちまって、馬鹿な野郎だ」

父の隆平は苦々しげにつぶやいたが、その父にしたところで、そう息子を叱れたものでもない。

父の隆平は数十年来、祇園に入りびたって、道楽のかぎりをつくしてきた。それも多紀達の母が生きていたころは、遊びながらもまだ小さくなっているところがあったが、十年前に、母の武子が死んでからは、帰らない日のほうが多くなった。

いま、若王子の家に一緒にいる義母の森子は、母の死後二年経って、隆平が祇園から見染めて連れてきた女性である。

隆平とは一廻り半も違う若さだけに、義母といっても、多紀とは十五しか違わない。その若い後添えをもらったせいか、隆平はそれから七年後に、狭心症で死んでしまった。しかも死んだ場所が、お茶屋の二階であった。

若い妻をもらっても、なおあきたらず、最後まで勝手気儘に遊び歩いた人だった。

この父では、隆彦を説教する力も自信もなかった。

いまさら弟の育てかたを弁明する気はないが、多紀はなんとなく家を捨て、過激な行動に走った弟の気持がわかるような気がする。

父が遊び歩いていたころ、多紀はすでに二十を過ぎて、男と女のことは、ある程度、理解することもできたが、それにしても、父がいない家で、義母と暮らす生活は味気なかった。

森子はよく気のきく、親切な義母で、どこといって欠点はなかったが、いざというときの優しさになると、やはり実の母にかなわない。お嫁に行く年になってまで、母恋し、では、甘えすぎると思いながら、その淋しさは癒やしようがない。

父のいない家で、血がつながっているのは、姉と弟だけである。六つも年齢が違い、姉と弟では、考えることも、興味の対象も、まったく違う間で、普通の姉弟以上に親しみを覚えていたのは、そんな残ったのは二人だけという意識が働いたせいかもしれない。

恩着せがましくいうわけではないが、多紀は高校を出てから大学にも行かず、家事を手伝いだしたのも、母がいなくなった弟の淋しさを埋めてやりたいという気持があったからでもある。隆彦も多紀のその気持はわかっていたはずである。

「姉さん、大学に行けよ」とも、「いい人がいたら、お嫁に行ったほうがいいよ」ともいった。「こんな家なんかに、いる必要はないさ」と、いったりもした。

口でこそ強いことをいっていたが、隆彦が多紀に、母の面影を求めていたことは間違いなかった。

もっとも、多紀がお嫁にも行かず、二十八まで年齢をとってしまったのは、隆彦への心づかいからだけではない。家事を手伝ううちに、母が亡くなり、その間に、若王子の家では、なくてはならない人になり、さらには趣味ではじめた扇面絵描きが、いつのまにか本職のように、なってしまったからでもある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

それも、そもそもは職人の描く絵の、平凡さに飽き足らなくなった吉岡に、「ひとつ描いてみやはらしまへんか」といわれたのが、きっかけだが、描いてみると、意外に面白かった。

「感覚がまるで違って新鮮です」

思いつくままに描いた影絵風の絵が、褒められて、小売店に出すと、これが意外に好評で、それから少し本腰をいれて描く気になった。

丁寧で根気のいる仕事だったが、自分の描いた絵が、人の手に渡り、さまざまな思いをかき立てると思うと、楽しさが増す。初めは絵だけ描くつもりだったのが、会社に行ったり、職人さん達に会っているうちに、次第に扇の商売にまで入りこみ、父が死んだあとは必然的に、女社長ということにされてしまった。

逃げようにも他になり手がない、形ばかりの社長といいながら、いざなったら、いい加減に出来ないのが多紀の性格である。

考えてみると、父の隆平が社長をしていたといっても、それは名ばかりで、実際は吉岡ら、子飼いの番頭達が切り盛りしてきたのである。隆平はほとんど花街に居続けで、ときたま会社に出てきて、使用人の報告をきくだけという社長だった。

吉岡が手堅い男だけに、なんとか切り抜けてこられたものの、これが悪い男だったら、いかな老舗の「辻村」とて傾いていたかもしれない。

もっとも扇子業界は内輪で小さくまとまっていて、地道に扇子をつくっているかぎり、たいして利益にもならないが、といって大きく落ち込むこともない。比較的、好不況の波の少ない業種である。普通の商売なら最も気をつかう販売のほうも、製造卸しから問屋、小売りと、一本のパイプでつながり、そこに任せるかぎりさして心配はない。

それより製造卸しで気をつかうのは、実際に扇子をつくる職人の扱いで、竹の切り出しから、けずり、紙屋から箱押し、仕上げと、一つ一つが専門に分化して、その工程だけで二十近くはある。この各々が、ほとんど手仕事で、職人の手になるのだから、これら職人達を上手に働かせるのが、製造卸しのこつということにもなる。

一日中、部屋にこもりきりで、要打ちなら要打ちだけを、何十年も続けてきた人達だけに、多少偏屈で、自信だけは人一倍強い、いわゆる職人気質の人が多い。この人達を、宥め、すかしながら使うには、相当世慣れた腕が必要である。

以前なら一方的に仕事を与え、うしろから追い立てればよかったものを、いまは職人が減り、相手のいい分もきかねば動いてはくれない。上に製造卸しがあって、下に職人と、はっきり上下の関係があったものが、いまは対等で、それどころか、このごろは職人の鼻息のほうが荒い。機嫌を損じないようにしなければ、出来るものも、出来上がら

ない。
父の隆平が女遊びをしだしたのは、生来のぼんぼん育ちからくる怠け癖があったことは否めないが、好意的に解釈すれば、かつては下に見てきた職人の機嫌をとらねばならない、そんな仕事に、いや気がさしたのかもしれない。
それにしても扇子製造卸しの社長など、女の身では、なかなか勤まるものではないが、そういわれると、ますますやる気になるのが、多紀の性格である。
「男はんでできること、女ででけへんことはないのと違いますか」
そんなことをいった手前もあって、いまさら多紀は、ひき返すわけにもいかない。
社長にはなってみたものの、この数年、多紀は見るもの聞くもの、すべて珍しく、ひたすら勉強の年月であった。
職人に笑われ、問屋筋に皮肉られ、子飼いの社員達にはあなどられ、ときには泣きたいこともあったが、辛抱第一と耐えて、どうやら、このごろは、辻村のお嬢さん社長として、通るまでにはなった。
業界ではたった一人の女社長で、はきはきした聡明さのうえ、目のくっきりした、生来の美貌が、人々の注目をひくらしい。
「祇園街住まいの先代さんよりは、ずっと上や」と評判もいい。
だが、家業に精出したその分だけ、家事のほうはおろそかにしたともいえる。
若王子の家には父が死んだあとも、義母と安代がいて、とくに多紀の手を必要とするわけでもなかったが、弟の隆彦とは、急速に疎遠になってしまった。
もっとも、多紀が父のあとを継いだころ、隆彦はすでに家を出ていたのだから、社長業への専心が、隆彦を学生運動にかり立てたとはいえない。だが、もう少し多紀が暇であれば、弟の下宿など訪ねて、ゆっくり話し合うことができたような気もする。
自分勝手に家を捨てた以上、弟がなにもいってこないのは当然として、多紀にだけは半年に一度ぐらい、思い出したように手紙を寄こす。それも葉書で、「寒くなったから、蒲団を左記のところへ一組送ってください」などと、都合のいい無心だが、そのあとにきまって、「体に気いつけて」と、一行だけ書いてある。
長男のくせに、家を出たことへの照れなのか、あるいはただ一人の、血の通った姉への甘えなのか、ともかく、多紀はその手紙を見て、ほっとする。それで弟が元気でいることだけでは確認できる。熱中している運動からは引戻れないにしても、ときに家を思い出すことがあるらしいことは想像できた。
はっきりいって、多紀はこの数年、朝の新聞を見るのが怖かった。もしかして、弟がなにか事件を起こして紙面に出るのではないか、と怯えていた。

子供の時から、優しい性格であった隆彦だから、そんなことはないと思いながら、もしや、と案じていた。なにもないように、週に一度は、近くの若王子の神社にお参りにも行っていた。

だが、ある朝、その危惧が見事に現実のこととなっていた。怯えていた、そのままの形で現れた。

いまから半月前、九月の二十日の朝、新聞の紙面を開くと、まさしく、そこに隆彦の顔写真がのっていた。

一週間前、京都七条の旅館に潜伏していた学生運動の幹部を、反対派が急襲し、鉄パイプや角材で、めった打ちにし、二人を瀕死の重態に陥し入れた事件の首謀者が、隆彦だというのである。

〈京大生、辻村隆彦、二十二歳〉という活字が、はっきりと多紀の目にとび込んできた。

新聞に弟の名前を見た瞬間、多紀は「ああ」と小さくうなずいた。くるべきものがきた、そんな気持で、心は意外に落ちついていた。

だがそれは決して、動揺していないということではない。あまり突然のことで、驚く余裕もなく、ぼんやり、紙面を見ていたというほうが当たっていた。

ことの重大さを改めて知らされたのは、その日の午後、警察が現れ、近所の人の間で隆彦のことが話題になりはじめてからだった。

この一年の隆彦の住所は、一応、大阪に近い枚方(ひらかた)、ということになっていたが、事件を起こしたあとでは、現住所に住んでいるわけもない。警官は事件のあとの、立廻り先として、若王子の実家をマークしてきたのである。

「もし立寄ったら必ず連絡してください、かくまったりしたら、犯人蔵匿罪になることがあります」

警官は言葉はおだやかだが、厳しい眼差しでいった。

もちろん多紀に隆彦をかくまう気はなかった。この世で血が通っている、ただ一人の弟だとしても、そんなだいそれたことをして許されるはずはない。こうなった以上、一刻も早く自首して罪に服して欲しい。

「来ましたら、必ずお届けします」

多紀はきっぱり答えたが、こんなことをしでかして、弟がのこのこと帰ってくるとも思えない。

警察は一旦、引上げたが、まわりに拡がりはじめた噂は、おさえようがなかった。

「辻村のぼんさんが、七条の騒ぎの首謀者で、警察に追われているらしい」

東京からみるとはるかに狭く、人と人とのつながりの密接な京都の街である。噂はたちまち、近所の人から社員、そして職人から問屋筋にまで拡がっていく。

「大変どしたな」人々は同情の眼を向けながら、多紀の表情を探る。

「お騒がせして、申し訳ありません」

多紀は自分が罪でも犯したように、ひたすら頭を下げる。

自分に直接関係ない、法的にはなんら責任のないこととはいいながら、それではとおらない。多紀が謝ることで、世間は同情しながら、一応、納得する。

多紀ははじめて、乗っとりや爆破事件を起こして、追われている犯人の家族の苦衷を知った。

この苦しさは、どこにもやり場がない。

一層のこと、自分がしでかしたことなら、責任のとりようも、詫びようもある。自分はなにもしないのに、姉だというだけで、なにか物騒なことを、しでかしそうな女にみられる。

「どうして、そんなことをしてくれたのか、姉さん辛いえ」

夜、そっと隆彦が使っていた机につぶやいてみる。

お墓にお参りしても、父も母も、なにも答えてくれない。多紀に出来ることといえば、ひたすら詫びて、いまわしい記憶が、人々の頭から薄れるのを待つだけである。

事件のとき、鉄パイプで頭を乱打され、意識不明のまま重態を続けていた青年が死んだのは、それから十日後の夕方だった。

多紀はそのことを、警察からの電話で知った。

青年の名前は、柚木洋一郎といい、東京の下北沢に住んでいる医師の息子だということだった。

「出来たら、お悼みに行ったほうが、いいかもしれませんな」

警官は強制でなくいったが、多紀には重く響いた。

翌朝の新聞には、「七条事件の重態患者、死亡」と片隅に小さくでただけだったが、京都版であっただけに、まわりの人には、かえって目についたようだった。

多紀は人々の目が、「内ゲバをやった学生の姉や」といういい方から、「人殺しの男の姉や」という見方に、変わっていくのを知った。

「どないしよ」

義母の森子と、安代に相談してみるが、二人とも格別の知恵はない。

「お悼みに行くのが、筋でしょうけど……」

森子は他人ごとのようにいって顔を背ける。その横顔には、たとえそうだとしても、自分は実の母でないから責任はない、という逃げがのぞいていた。

「でも、隆彦はんは、ずっと前から出たきりで、家とはあんまり関係がありませんなあ」

安代は自分達まで責任を持たされるのは、納得できないという顔である。

どちらにも一理はある。だが理があるだけで、自分から動こうとする人はいない。

思いあまって、多紀は吉岡に相談してみた。吉岡は身内でないので、お門違いだが、こんな相談をできるのは、彼しかいなかった。

「法律の上では、別に謝る必要あらしませんが、でも行っ

たほうが、よろしおすやろな」
吉岡は例の無愛想な表情でいってから、
「このままじゃ、人殺しの家や、いわれて、仕事のほうにも、差しつかえがないともいえませんし」
「もう、みんな知ってはるのやろな」
「職人は、そんなことでも話すより、話のタネがありませんからな、まあ職人はそれでよろしとしても、問屋さんや、銀行のほうの信用にかかわりますし……」
「銀行まで？」
「四条の支店長さんも電話をくりやはりまして、大丈夫かいなって」
多紀はうなずきながら、改めて噂の怖さを知った。
世間の好奇の目が怖かったが、それにしても噂は早い。多紀自身が当事者であるために、みなは控えていたのだろうが、裏では大きな話題になっていたらしい。
「あたし、行ってくるわ」
とやかくいっても互いの信用で成り立っている商売である。
多紀が決意したのは、その日の夕方だった。
学生同士の内ゲバで、相手を殺したとして、その加害者の家族が、はたして被害者の家まで、謝りに行かねばならないものなのだろうか。
そのことについては、人によって、いろいろな考え方があるかもしれない。
法的に責任はないのだから、行くまでもない、という意見もあるし、法的責任はともかく、道義的責任はあるはずだという考えもあるかもしれない。
反対に、加害者といっても集団で、隆彦一人が手を下したわけではないのだから、そこまで責任を感じる必要はない、ともいえるかもしれない。また、一つ間違えば、隆彦のほうが殺されたかもしれないのだから、そのあたりはお互いさまだ、という考え方をする人もいた。
なかには大学まで行って、一人前の大人として扱われている者達がやっていることに、いちいち身内の者が責任を感じる必要はない、という人もいた。
だが、多紀はそうした理屈や責任論だけで、行くことを決意したわけではない。そういうことは、いくら議論しても、堂々めぐりするだけである。それより、多紀が行くときめたのは、ただ一言、子供を失った両親にお詫びをいいたかったからである。
そこで笑われようと、罵られようと、多紀には関係ない。
内ゲバであれ、集団であれ、とにかく身内の者が人を殺すことに加担した以上、謝りに行くのが礼儀である。
世間様に迷惑をかけといて、黙っているわけにはいかない。それが人と人とのつながりというものである。
多紀はごく素直な、当たり前の感情で、東京へ行くことを決心した。
「大変どすなあ」といわれ、「ご苦労さん」と同情の目を

向けられても、多紀はにっこりと笑ってみせる。
血を分けた弟のしでかしたことに、姉が謝るのは、自然の、ありうべき姿である。それを辛いといったり、同情をかおうとするのは、甘えというものである。多紀のこうした律義さは、おそらく「辻村」という老舗で、育てられてきた結果かもしれない。
たとえ法的には、大人であり、独立した人格だといっても、隆彦が「辻村」の息子で、多紀の弟であることに変わりはない。法的にはどうであれ、辻村の身内である事実は消えはしない。多紀は、やはり、「辻村」という名を大切にしたい。世間的には人殺しを出した、忌むべき家かもしれないが、それだけに逃げも隠れもできない。
きちんと謝り、世間的にするべきことだけはしておきたい。辛くても、それが一人で老舗を守ってきた、多紀の心意気でもある。
間もなく、電車は名古屋の駅に入った。名古屋の街も、ホームの端も雨で濡れている。
すぐ新しい客が乗り込み、あいていた多紀の横の席に、五十前後の男性が坐った。男は一旦、多紀の顔を盗み見てから、週刊誌を開いた。
電車のなかでも、多紀のはっきりした美貌は目立つのかもしれない。
やがて、電車はゆっくりと名古屋の街を抜けていく。あと、東京まで二時間である。
まだまだだと思う反面、いよいよ近づいた、という緊張を覚える。
いままで、多紀は何度か東京に来ている。大体、月の初めの比較的、暇なときに、日本橋の問屋筋に打合わせをかねて、挨拶にくるのが慣しだった。
こういうとき、三時間の新幹線の間は、あまり長いとは感じない。むしろ、いろいろな雑事から解放されたという安らぎでほっとする。
二十数年間、男っ気なぞ、少しもなかった多紀だが、一人旅は解放感からか、隣の席に素敵な男性が坐ってくれるといい、と思ったときもあった。それでどうということもないが、ふと冒険を求めてみたい気持になることがあった。
だがいまの多紀に、そんな余裕はない。
少し休もうと思っても、ついこれから行く通夜のことが思われる。
もし誰かが激しく責めてきたら、どうしよう……。
なんといわれようと、ひたすら詫びるだけで、それ以外の方法があるとも思えない。
とにかく気を強く持つことだ。
責められて、こちらから泣き出したりしては、みっともない。それでは詫びに行って、笑われるだけである。
多紀は自分でも、気の強いほうだと思うが、今度だけは自信がなかった。なにごとも、はっきりさせておきたい性格だけに、つい、あらぬことを口走ってしまうかもしれな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.